
レトルトカレーの時間

小出 あかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レトルトカレーの時間

【Nコード】

N4256F

【作者名】

小出 あかり

【あらすじ】

「食べちゃダメ」。そう言われていたにもかかわらず、主人公の聡一は恋人の梨々子が楽しみにとっておいた『レトルトカレー』を勝手に食べてしまった。後悔した聡一は……。

「食べちゃダメ」

そう言われると、食べなくなるから人の心は不思議だ。

聡一は恋人である梨々子の部屋の、保存食用の棚を開き、一人悩んでいる最中だった。

この部屋の主である梨々子は、今日はバイトで留守だ。帰宅は店が終わる10時すぎ。炊飯器の中のゴハンは炊きたてで、聡一の腹はぐうぐうと鳴っている。棚の中には3つのレトルトカレーが入っており、その中の2つは『カレーの月曜日』、そしてもう1つはコンビニ売りの新発売、『有名店のウマイカレー』だ。

梨々子はこの、『有名店のウマイカレー』を楽しみにとっていた。何しろ発売されるとすぐに売り切れるシリーズだ。そのうえたった一つしか手に入れることが出来なかった。梨々子は売れ残った最後の1箱をゲットしたのだ。

「絶対に食べちゃダメだよ。これは私が食べるんだからね」

梨々子は聡一に、何度も釘をさした。

だが……。

今、梨々子はこの場所にいない。

そして聡一の今日の気分は『カレーの月曜日』ではなかった。

どうしよう？ 『カレーの月曜日』を選ぶべきか、それとも『有名店のウマイカレー』をとるべきか？

聡一の心は揺れた。

そして最後には、己の心に負けてしまった。

聡一の手は、『有名店のウマイカレー』をつかんだ。そして封を切る。もう後には引けなくなった。

「ごめん、梨々子」

そうつぶやいて、聡一は鍋の中の熱湯にレトルトカレーの袋を投げ入れる。湯立つ鍋の中で、レトルトカレは徐々に温まっていく。

そして30分後。

聡一に後悔が押し寄せたのは、食べ終わった後のことだ。
どうしよう？

梨々子がせっかく楽しみにしていたカレーを……あろうことか食べてしまった！

聡一は悩んだ。

その時、床に転がっていた『有名店のウマイカレー』の箱が目にとまる。

そしてひらめいた。

そうだ、中身を入れ替えよう。確かまだ棚の中には『カレーの月曜日』があつたはず。

聡一は保存食用の棚の前に行き、『カレーの月曜日』の箱を開けた。そしてその中身を、『有名店のウマイカレー』の箱の中に押し込んだ。

これでよし、と。

聡一は『有名店のウマイカレー』の箱を糊付けし、そしてまた保存食用の棚の中にしまった。

空箱となった『カレーの月曜日』をゴミ箱に捨てると、聡一は独り言をつぶやいた。

「ゴメンな、梨々子。許してくれ」

そして聡一は、自分の行いをきれいさっぱり忘れてしまった。再び保存食用の棚が開かれるその日まで……。

程なくしてその日はやって来た。

梨々子と聡一はある日曜日、同じ電気量販店のバイトを終わらせて、一緒に帰ってきたのだった。梨々子は言った。

「ああ、今日は疲れたな。聡一、今日はレトルトカレーで済ませてもいいかな？」

聡一は軽く、

「ああ、いいよ。カレーは好きだから何食続けて食べてもいいくら

いだ」

それを聞いた梨々子はすぐに保存食用の棚に向かった。棚をあけると、そこには『カレーの月曜日』と『有名店のウマイカレー』が2つ並んでおいてあった。

「ああ、そうだ。『有名店のウマイカレー』だ、今日こそ食べる時なのね」

梨々子の言葉に、聡一はハッとした。

苦い記憶がよみがえる。

だが、聡一はつとめて平静を装った。

「『有名店のウマイカレー』って、結構人気があるんだろ？」

「ふふふ。だから私も目をつけてたんだー」

梨々子は鍋の中に水を入れ、湯を沸かしはじめた。そして鍋の中の湯を見ながら、梨々子はふとこんなことを言い出した。

「そうだ、聡一も食べてみない？」

「え？ 『有名店のウマイカレー』を？」

梨々子はうんうんとうなずいた。

「だけど1個しかないんだろ？ どうやって2人で食べるんだよ？」

梨々子は言う。

「もち、半分ずつ食べるんだよ。『有名店のウマイカレー』と『カレーの月曜日』と」

聡一はギクツとした。

それはマズイ。

箱の中身はどちらも『カレーの月曜日』なのだ。半分ずつ食べたら、一発でバレてしまう。

聡一は梨々子に言った。

「いいよ。せっかく楽しみにしてたんだろ？ 梨々子一人で『有名店のウマイカレー』を食べるといいよ」

梨々子は言った。

「ええ？ でもさ、せっかくの機会じゃない。私はね、聡一にもおいしいカレーを食べて欲しいと思ったんだよ。一緒に半分ずつ、食

べようよ」

聡一は困ってしまった。そして苦し紛れに出た言葉は、

「ああ、そうだ！ カレーと言って思い出したけど、駅前新しく開店したインドカレーの店があったろ？ これからあそこへ行こう」
だった。

「ええっ？ なんで急に？」

反論する梨々子。

「いいよ。せつかくお湯を沸かしはじめたんだもん。このまま今日はレトルトカレーで済まそうよ。で、また次の休みの時にでも、ゆつくり食へに行けばいいじゃない」

「イヤ、今すぐ行きたい。なんか急にインドカレーが食べたくなってきたんだ」

聡一は必死に取り繕おうとして、いろいろ言葉を投げかける。が、それがかえって梨々子の不信感を煽った。

「なに？ 聡一、なんか隠してない？」

「イヤ、そんなことはないよ。気のせいだよ」

そこで電話が鳴った。

梨々子が電話に出る。

電話の主は、梨々子の友達の真澄だった。

「あ、真澄。どうしたの？」

真澄は電話の向こうでこう言った。

「ねえ、梨々子はさ、『有名店のウマイカレー』は手に入れた？」

「うん、1個だけね。今食べようと思ってたところなの」

すると真澄は興奮した口調で梨々子に語る。

「実はね、駅の反対側のコンビニで多量に手に入れたんだよ。もし良かったら、分けてあげるけどいる？ 今すぐ持っていってもいいよ」

「え？ くれるの？ 助かるなあ」と梨々子。

「うん、とりあえず1個でいい？」と真澄。

「ちようど良かった。今ね、聡一と2人で食べようとしていたとこ

るだったんだよ。1個手に入ったら、1人1個ずつ食べられてちよ
うどいいよ」梨々子が言った。

それから5分ほどして、真澄が梨々子の部屋を訪れた。そして『
有名店のウマイカレー』を1箱置いて帰っていった。

聡一は助かった、とばかりにホッと一息ついた。

「ああ、これで2人で1個ずつ食べられるね」

「うん。さっそく温めよう」梨々子が言った。

すると聡一は言った。

「じゃあ、梨々子は友達に貰った方にしなよ。僕は梨々子が買って
きた方を食べるからさ」

梨々子はまた疑いの目で聡一を見た。

「えー、何で？ だって、どっちを食べてもおんなじじゃない？
なんでこっちを私が食べなきゃいけないの？」

そして梨々子はたとえ付いた。

まだ封を解いていないはずの『有名店のウマイカレー』、どうも
箱の開け口の合いが悪い。梨々子は首をかしげながら封を開け、そ
して啞然とする。

箱の中には、『カレーの月曜日』が入っていたのだった。

「なんで『有名店のウマイカレー』の箱の中に、『カレーの月曜日』
が入っているのよ？ なんで？ 聡一、なんでなの？」

聡一は言った。

「ゴメン。入れ替えたんだ」

「じゃあ『有名店のウマイカレー』は？」

「ゴメン。食べちゃった」

梨々子は手を腰にあて、聡一の前で仁王立ちになった。

「あのねえ、あれほど食べちゃダメって言ったのに、聡一ったらズ
ルイよ。こうなったら……」

「こうなったら？」

「駅前の『インドカレー屋』のカレーはぜんぶ聡一の奢りだからね。
これで心おきなく奢ってもらえるわ」

聡一は再び頭をさげた。

「ドウモスミマセンデシタ」

そして梨々子はカレー皿にゴハンを盛ると、レトルトカレーを湯から取り出した。

梨々子は封を切ると、『有名店のウマイカレー』と『カレーの月曜日』を半分ずつ皿に盛った。

「じゃあ、最初の予定通り半分ずつね」

「え？」聡一は驚いた。

「僕が勝手に食べちゃったのに、半分ずつでいいの？」

「いいよ。やっぱりおいしいものは、恋人と一緒に食べるのがいいんだよ」

梨々子はコタツに2皿のカレーライスを運んだ。そして梨々子と聡一は向かい合って座った。

「さあ、食べよう。2人のレトルトカレーの時間だよ」

梨々子と聡一は、いつものように向かい合って頭をさげ、
「いただきます」

と言った。そしてカレースプーンで、カレーをすくって食べ始めた。

テレビはニュース番組を流している。今は夕方。もうすぐ聡一の好きなスポーツニュースが始まる時間だ。

2人の時間は、始まったばかりだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4256f/>

レトルトカレーの時間

2010年10月8日15時49分発行